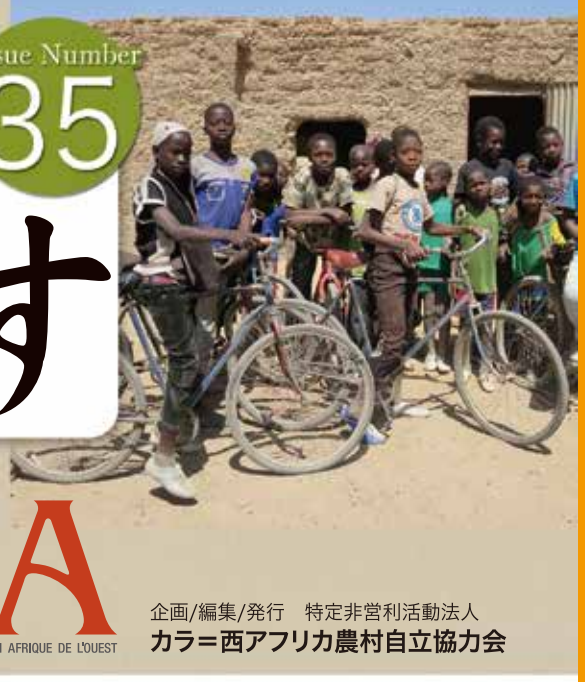
支えあう喜びを新しい世代へ
Issue Number 35
Calebasse
からばす
CARA
ASSOCIATION POUR LA COOPERATION ET L'AUTOGESTION RURALE EN AFRIQUE DE L'OUEST
企画/編集/発行　特定非営利活動法人
カラ＝西アフリカ農村自立協力会



http://ongcara.org/
からばす NO.35 2016/4/1 発行

出会いのちから　～グローバル教育を考える～

宮城学院中学校高等学校　教頭　**鈴木 理恵**

今、政府は加速するグローバル社会に通用する人材育成を目指して、急ピッチで様々な政策を打ち出しています。2014年度から始まったスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業は、『高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的教養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ること』を目的とする、としています。

これに連動するように2020年度から大学入試が大きく変わります。文部科学省は「高大接続システム改革」を検討してきました。これまでの正解を導く入試ではなく、学び得た知識を用いて未知の問題にどのような答えを導き出すのか、正解のない問題を記述する力が問われます。それを自分の言葉で伝える力を求めています。これまでの知識偏重、正解を導き出す入試から「思考力」「判断力」「表現力」重視への転換です。

それらを実践するために当然必要とされるキーワードは語学力です。文部科学省はグローバル化に対応した英語教育改革案を提示し「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指しています。何やらすごいことが始まり、日本の教育が大きく変わろうとしています。しかし「グローバル教育とは何か」という本質に迫らないと、新しい入試システムの対策に走りテクニックだけを習得すればよしとなってしてしまうのではないかと懸念します。

私はグローバル社会を見据えた、学校独自のプログラムを持つことが大切だと考えます。なぜなら、グローバル人材に必要な力や教養を育てる教育のやり方は決して一つではなく、様々

な方法や手段の中から学校の教育方針や建学の精神、教育内容などと関連付けて、各校が実践をしていく中でその独自性が生まれてくると思うからです。

本校では今年の8月、創立130周年の文化祭にマリ共和国よりカラの現地女性スタッフであるアワさんを招待することになりました。12年間続けてきたマリの女性の自立を支援するという取り組みが、マリの女性にどのような変化や成果をもたらしたのか聞いてみようと生徒たちが招待状を書き始めると、マリと日本の距離がぐんと近づきました。アワさんがやって来るという出会いが引き出すちからは、生徒の興味関心を大きく膨らませます。

学院寄贈の識字教室で学ぶ子供達

アワさんの渡航費用は昨年、自分たちが運営したバザーの収益金と退職教員からの募金で準備しました。12年前、英語の教科書でカラ代表の村上先生を知りその生き方に心を動かされて始まった小さなボランティアが、自分たちと同じ年齢の女の子が子供を産み母親となっている現状を知り、本当の自立とは何かを考えたとき、「教育」の大切さにたどり着きました。そして10年前の創立120周年には全校生徒、保護者、教員が大きなバザーに取り組み識字教室を寄贈することができました。

自分たちの学校もアメリカの宣教師の方の支援を受けて建てられたように、マリに学校を贈ろうとその思いを重ねたのです。人と人が繋がるということはどんな力を生み出していくのか、そしてさらに10年後どのような学びに発展しているのか、夢を乗せたバトンは生徒の手でつながれていくことでしょう。

現地活動報告　村上 一枝

訃 報

カラの活動において、またアフリカと日本・日本人を理解する「人」として、大きな存在を２０１６年３月２１日に失いました。カラ創立前、現代表が個人ボランティアとして活動していた時点から、約３０年近く我々と同じ道を歩み、我々の活動と多くの日本人を支えてくれたシェッキ・ティジャン・アマドウ・ジャワラ氏が入院先で死去しました。その日は、バマコ市のホテルで何回目かのテロリストに依る襲撃事件のあったのと同じ日でした。

カラの東京事務局に「体調がすぐれないから検査入院する」と通知があり、そのまま帰宅する事が出来なかったのです。私は３月１６日にバマコへ到着し、翌日入院先を訪れました。

彼の欲していた、日本の美味しいスープとリンゴ、ビタミン剤を沢山運びました。その翌日は洗面所へ歩く事が出来るように元気でした。しかしその夜から昏睡状態に入り、４日後に亡くなったのです。大きな星を失った気持ちです。

彼の入院先を訪れて、マリの医療体制が非常に貧弱なのを目の当たりにしました。精密な検査はマリでは不可能なのです。緊急な場合も医師を探しに病院中を走り回らなければいけません。失礼な事ですが、医師の資質もとても大きい問題です。そして看護体制は全くゼロで、自分で看護師を連れて行くしかないのです。

多くの人はマラリアの慢性化が余病を併発して亡くなるのです。

しかし一方で、出稼ぎの人や田舎に住む人は「病院で死ぬ」事をステータスと考えており、金持ちは歩ける内にフランスに検査に行きます。

このような状況は何とかならないでしょうか？　私はこの問題はもはやボランティア団体の支援の域を逸脱し、政府の問題と考えます。

未だマリに日本大使館が無かった時代に、日本大使館員とマリの国立病院を視察した事があります。そこには、現地の人が読めない日本語の説明付きの冷蔵庫や医療器械が支援され、使われないままにさびていました。病院側は平然と「日本語の説明は読めないから使えない」と言います。「どうして読めない文字の説明書を付けてくれるのか？」と言うことです。イスラム教の人たちですから、〈富むところからは貰って当然〉で、〈知らないから勉強して好意に答える〉という感覚は無いようです。

先進国からの支援を手玉にとって富を肥やしている政府高官、また現地ＮＧＯや村から平気で賄賂を受け取るような役人。このような理由により腐敗した状況が形成され、一般住民も巻き込まれてしまうのです。言葉巧みに我々に取り入ろうとする人たちの心の内も読めなないで、「それが正しい」と考えて何の疑念も持たない日本人側の責任も非常に大きいのです。こういった事が続けば、我々を軽んじるようにもなります。確かに、発展には自助努力が必要ですが、現地の人たちが希望を持って喜びながら自助努力を進めるような支援の方法（テクニックも）を考えるべきです。支援を頼る生活から抜け出す為に、努力の甲斐があった、と心から思える様な支援の仕方が必要とおもいます。

ジャワラと村上（オバ村でランチの時）

垣間見たマリの医療事情から、多くの事を反省するチャンスを得ました。残された現地スタッフを含む我々カラのスタッフは、彼の死によって事業を停滞させることなく続けて行きます。これまでわが事の様に多くの日本人を支えてくれた事に深く感謝しております。　合掌

2015年開設のニャマコロブグー小学校とシンザニ中学校

２校が外務省Ｎ連事業資金で建設され、現在は授業に使用されています。

シンザニ中学校は、新一年生が現在約120名ですが、次期からは、現在ドゥンバ中学校へ通学している生徒も転校して来ると言うことです。

新規の３教室中、１教室だけが中学一年生用として使用され、他の2教室は小学校へ貸しています。シンザニ小学校は３教室しかありませんので、年々生徒数が増加し教室不足になっています。

ニャマコロブグー小学校では、村の自主管理委員会が「村内の就学適齢期の子供は小学校に就学するように」と広報に努め、各家庭を回っていると言うことです。

ニャマコロブグ旧校舎（左）と新校舎（右）

今年度の新事業開始

昨年度（2015年度）3月3日に外務省の日本ＮＧＯ連携無償協力による事業契約を締結しトウグニコミュンに小学校を2ヶ村（ゲンドウ村･ドンギネ村）に新築と他の2ケ村の小学校（コニナ・モバ村）へ各3教室を増築します。これらの4ヶ村を訪問し、事業の開始を伝え、学校維持に関するソフト面の指導を行なってきました。

長い間崩壊寸前の土れんがの教室で授業を続けていたドンギネ村では、女性達が喜びの踊りで歓迎してくれました。この村からトウグニ中学校まで自転車で10kmの道を通学している少年たちも多いのです。ゲンドウ村も同様で教育熱が高い村です。

コニナ村、モバ村小学校も教室の不足により新一年生の入学は隔年になっていますが、建設後はこの状況は回避されるでしょう。

他の事業として、ドウンバコミュンのバブグ村とニャマコロブグー村には新規の産院が4月から開設予定です。（バブグ村産院はJICSの助成金、ニャマコロブグー村産院はカラの会員の方の御寄付に依るものです。新産院にはＷＦ基金の御支援で分娩台や薬剤庫、その他の必要な備品が整備されました。村の人たちが運営管理する産院としての環境が整いました。今後は安全な出産と、今まで大きな問題であった産後の経過不良が改善されることでしょう。一般疾病（マラリアや下痢、皮膚病、その他）薬品も準備されるので、地域の人たちにとっては本当に役に立つと思います。

これまでは、この地域には、産院が1ヶ所だけでしたが、今後は3ヶ所になります。カラは新産院開設を機に、2008年から3年間を要して、トウグニコミュでJICA資金により地域女性健康普及員155人育成し、現在その成果が大きく出ています。この事業を手本に同様の事業をドゥンバコミュンでも開始します。

トウグニコミュンの成果をドゥンバコミュンの人たちは伝え聞いていますで、啓発は容易です。しかしこの事業には充分な資金がありませんので、各村の5人の女性を育成するというわけにはいきません。とりあえず31ヶ村から10ヶ村を選択し、各村より5人（50人）を基本とし、他はボランティア参加として受け付けます。カラ主催の研修会なので資金的に余裕がないため、通常参加者に研修終了時に与える清掃具やユニホーム等は、ボランティア参加者にまでは行き渡りません。

女性健康普及員は、多くの衛生知識や病気予防などを広く浅く学びます。研修終了後は村へ戻り村人へ普及するのです。文字で指導するものではなく、記憶だけに頼りますから忘れてしまう事も多く、1回の研修期間（13日間）で終わるわけではありません。忘れたら再研修です。指導する側も学ぶ側も根気が必要です。

この事業は、アワと村上、アシスタントスタッフの青年2人が担当し、バブグ村とニャマコロブグー村の新助産師が協力します。

モバ女性会議

アワの来日間近！！

10年以上もカラのマリでの事業を理解し支援して下さっている宮城学院の生徒さんたち、また教職員やご父兄の方々からのご招待で、7月20日にアワの来日が決まりました。

今年は宮城学院創立130周年に当たり、式典やイベントへの参加も含まれます。今号の巻頭文をお寄せ下さった、鈴木理恵副校長先生のご尽力によるものです。

既にこれまでに何回か、生徒さんたちとマリのアワとの間でお手紙の交換がありました。生徒さんたちとの交流だけでなく、生徒さんたちと一緒に東北大災害の被災地訪問も計画されております。

カラでは、7月31日にアワを囲んでトークイベントを日本歯科大学九段ホールで開催いたします。

どうぞお越し下さい。

【トークイベント：アワを囲んで ～アフリカ農村女性の生き方と自立～ 】

出 演：アワ カンサイ（カラマリ人　スタッフ）
　　マンスール ジャニュー（セネガル人）
　　村上　一枝
日 時：２０１６年7月３１日
場 所：日本歯科大学 九段ホール　（JR飯田橋下車、西口出口より靖国神社方向へ５分、右側）
参加費：５００円
問合せ：e-mail：centre@ongcara.org　tel：090-4544-9677（村上直通）

からばす no.35 企画/編集/発行　特定非営利活動法人　カラ=西アフリカ農村自立協力会

次にご紹介いたします論文は、宮城学院中学校の英語の授業で取り組んでいる英語弁論へ応募し、仙台市英語弁論大会で優秀賞を得た佐藤優芽さん（現在宮城学院高等学校1年生）の論文です。内容は、カラを通して行なっているマリ共和国支援の為のバザーへの取組みから、マリの女の子を思って書いた論文ということです。日本語訳と共にご紹介いたします。

Starting to Imagine

Miyagi Gakuin Junior High School **Yume Sato**

Have you heard of the country, Mali? Mali is a landlocked country in West Africa,　bordered in the south by the Niger River, the west by the Senegal River, and the north by the Sahara Desert. Mali is a country of cattle farms, food crops, cotton, peanuts and gold mines. However, the people in Mali are faced with poor conditions and other difficulties.

I first heard about Mali through my global studies class at school. I learned that Mali's farmland is slowly turning into a desert and people cannot get enough food. In addition, medical supplies are not enough and many children die of sickness.　Even school is something some people in Mali cannot take for granted. Many adults there cannot read or write at all. What shocked me most was the early marriages of some girls. They often get married at age fifteen, and have to bring up their children while working full time. That is the same age as me!　Getting married? Having children? Working full time? Try to imagine that!

For those of us born in Japan, we grow up with few problems. If we are hungry, we can get food. If we are thirsty, we can easily find something to drink. I cannot even imagine getting married and bringing up children yet! I want to study! I want to spend time with my friends! I would rather get married at thirty than fifteen! For some girls in Mali there is no room to imagine such freedom.

Imagining their lives, I began to wonder if there was anything I could do for them. I could send them pencils, or notebooks to study with, or ask for donations with my friends. Maybe we could have a bazaar at my school's festival, and give the proceeds to those in need in Mali.

Or maybe I could spread the word – let more people know about their situation.

I found out that my school had been working to help the people of Mali for ten years already. With their work, my school has been able to support education in Mali—sending teaching and learning materials, and helping build schools. Last year, I made some bags to sell at our school's bazaar. With every stitch, I imagined the girls my age in Mali. I imagined them using the study materials my work would help them buy, and felt so happy.

The children we have helped in Mali have been thinking of us as well. After the Great East Japan Earthquake of 2011, we received a hand-written letter of support from a girl at one of the schools we helped build. It said, "to the people of Japan, my heart goes out to you."　I was touched by her words.

There are many countries in the world besides Mali where children suffer and struggle through life. These children sometimes are caught up in war and die for no reason. Whenever I hear about them on TV, or in the newspaper, I try to imagine what they must be going through. Doing that helps me understand them−to begin to know them.

In the process, I begin to understand and know myself better. Each step towards understanding is small, but I know I must keep putting one foot in front of the other.

I believe these steps will add up to something greater.

I ask you all to start the same process. To start to imagine.

日本語訳「想像から始めよう」

宮城学院中学校　3年　佐藤優芽

皆さんは、マリというかわいい名前の国を知っていますか。マリは西アフリカの内陸に位置する国で、南にニジェール川、西にセネガル川、北にサハラ砂漠の大地が広がる大きな国です。マリの主産業は農牧業で、穀物や綿花、落花生などが栽培されています。また、金も産出され、かつては「黄金の帝国」と呼ばれていました。世界文化遺産にも3ケ所登録されていて、ユニークな建築物、美しい民族衣装など、マリは西アフリカの観光スポットの1つとなっている国です。しかし、その一方で、マリで暮らす人々は「貧困」という大きな問題に直面しています。

私は学校のGlobal Studiesの授業の中で、マリ共和国を支援している方から現状や人々の生活について話を聞く機会がありました。マリは大地の砂漠化が進み、農地が少なくなり深刻な食糧不足に陥っているそうです。また、医療が充実していないため十分な治療が受けられず、小さい子供たちがたくさん亡くなっているとのことでした。それから、日本では学校で字を習い、勉強するのが当たり前ですが、マリでは学校もなく字が書けないまま大人になる人も多いそうです。中でも、私が一番驚いたことは、マリの女性たちは15歳になると結婚し、子供を産み、子育てしながら一生懸命働いているということでした。

15歳といえば今のわたしと同じ年です。私と同じ15歳の少女が結婚、出産して家族のために働く。皆さん、この大変な状況を想像してみてください。私たちは日本に住み何不自由なく暮らしています。お腹が空けば食べたい物が何でも食べられますし、のどが渇けば簡単に飲み物が手に入ります。15歳で結婚し、子供を育てるなんてとても考えられません。私はもっと勉強をしたいですし、友達と楽しいことをして過ごしたいです。結婚は30歳になってからでもいいとさえ思います。でも、マリで生まれ育った女性はそうすることができません。自分の生き方を選べる現状ではないのです。

私は、私と同じ年の少女たちのことを想像してみました。きっと勉強もしたいだろうな。友達といっぱいおしゃべりしながら楽しい時間を過ごしたいのではないかな。そう考えているうちに「マリのひと人のために自分にできることは何かないだろうか」と考えるようになりました。マリの人達のために鉛筆やノートなどの文房具をプレゼントするのはどうだろう。友達と一緒に募金活動をしてみてはどうだろう。文化祭でバザーをしてその売上げを寄付したらどうだろう。そうだ、支援する仲間を増やすためにマリのことをみんなに教える活動をしてみてはどうだろう。そんなふうにマリの人たちのためにできることがどんどん見つかりました。

実は、私たちの学校ではマリの人々を支援する活動を10年以上も続けています。私が想像したようにきっと先輩たちも同じように考えたのではないかと思います。今まで教科書や文房具、教材費などを支援したり学校を建設したりすることもできました。私は昨年のバザーに手作りのバッグを出品しました。マリの同い年の少女たちが頑張っている姿を想像しながら1針1針心を込めて一生懸命作りました。その売上げが教科書や文房具になりそれを使って勉強している姿を想像したとき、とてもうれしい気持ちになりました。こうした活動からマリの人たちとの交流が深まり、東日本大震災の時には、その学校で勉強して字を覚えたという人からお見舞いのお手紙が届いたのです。

マリの他にも世界には貧困で子供たちが苦しんでいる国がたくさんあります。また、戦争に巻き込まれて何の関係もない子供たちが犠牲になっている国もたくさんあります。毎日テレビや新聞で報道されるニュースを目にし、耳にした時、私はその現地の子どものことを想像してみるようになりました。想像をするといろいろなことが考えられます。想像するということは相手を知るということ。さらに自分のことを知ることにもつながると思うのです。それは小さな一歩かもしれませんが、大切な事はその一歩を踏み出すだけで満足せず、前に歩み続けること。小さな一歩が後に大きなことを成し遂げることにつながると思うのです。

さあ、皆さんも想像することから始めませんか。

国内活動

10/13	**【いきな倶楽部】**にて講演	新潟県村上市
10/18	**地域への広報についての連絡会**	武蔵野市東町有志宅
10/20	**日本中近東アフリカ婦人会主催【第18回チャリティーバザー】**に参加	ロイヤルパークH
10/31	**【盛岡ふるさと会】**にて活動紹介	ホテルグランドパレス
11/1	**【東京都女性歯科医師の会】**にて活動紹介	六本木ヒルズ
11/1	**岩手県【紫波町ふるさと会】**にて活動紹介	東武ホテルレバント東京

2016年

2/9	**いこいの会にて講演**	いこいの場（武蔵野市吉祥寺）
2/28	**カラ チャリティー コンサートかけはし2016**	銀座・十字屋ホール

＜2016年4月以降の予定＞ ＊変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください。

4/3	**日本歯科大学校友会主催【女性歯科医師の集い2016】**にて講演	ホテルメトロポリタンエドモンド
5/21	**明星大学にて講演**	明星大学
7/31	**【カラ講演会　アワを囲んで】**	日本歯科大学九段ホール
8/15～8/31	**宮城学院創立130周年記念祝典行事に参加**	宮城学院（仙台）

からばす（Calebasse）－第35号－　2016年4月1日発行

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会 http://ongcara.org/

東京事務局
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102
Tel:0422-29-7640 Fax:0422-29-7688
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局
BP E367 BAMAKO MALI
Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589

デザイン:DeeplusDesigns